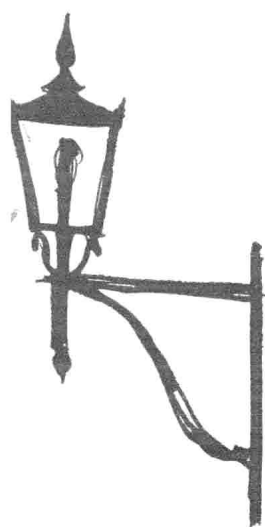


井上靖
だつみ
第一部



岩波書店

わだつみ 第一部

一九七七年二月一六日 第一刷発行 ©

定価二〇〇〇円

著 者 井 上 靖 いのうえ やすし

発行者 岩 波 雄 二 郎

発 行 所 〒101 東京都千代田区一ツ橋一五〇
株式 岩 波 書 店

電話 〇三六五二四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・松本製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

わ
だ
つ
み

序 章

序 章

日本人北米大陸移民の先駆はドイツ人エドワード・シュネールに率いられて渡米した東北の農民二十名の一団である。一八六九年（明治二年）のことである。これより一年前の一八六八年に百五十三人の日本人が移民としてハワイに渡っているが、大陸への移民はシュネールの一団を以て嚆矢とする。

シュネールはもともと鉄砲商人で、会津、庄内両藩に鉄砲を売り込み、そうしたことから会津藩に仕えて砲術の師範となり、平松姓を許されて武平と名乗り、妻も亦会津藩士の家から迎えている。徳川幕府が瓦解して、日本が明治という輝かしい黎明期を迎えた時、時代の大きい転換は多くの武士たちから生きる道を取り上げたが、シュネールも亦その犠牲者の一人であったに違いなかったし、特に異国人である彼の立場は一層苦しいものであったろうと思われる。シュネールは日本で生きる望みを棄て、新しく生きる場所を他に求めようとした。その新天地が北米加州だったのである。

シュネールは北米移民二十名を募り、八年間の労働契約を結んで、一八六九年二月と、同年十月と二回に互って、彼等を汽船チャイナ号でサンフランシスコに運んだ。シュネールは労務者を

募って、自分の事業のために彼等を北米大陸へ運んだのではなく、シュネールと若者たちの繋がりに多分に同志的なものがあつたことが認められる。シュネールと行を共にした農民たちは二十名とも言われ、四十名とも言われているが、私には彼等が働いた開墾地を訪ねてみた印象から、シュネールに己が後半生を託した農民たちを二十名とする方が実情に即した推定ではないかと思われる。農民の集団と言つたが、全部が全部農民ではなく、後述するように武士上りも居たし、大工も居た。

シュネールの一団はサンフランシスコからサンホーキン川に沿って溯り、サクラメントに到着、その風土氣候が日本に似ていることを知って、開墾地をその附近に求めることを決意したのである。このことは後にこの集団の一員であつた者の口から語られている。彼等が選んだ場所はサクラメントから東へ四十五マイルの地点であつた。そこに土地六〇〇エーカーを購入し、粗末な住居を建て、「ワカマツ・コロニー」と名付けた。今の言い方で言えば開拓移民団である。農業と果樹の栽培がこの集団の目的であつた。彼等は蜜柑、甲州葡萄、茶、桑などの苗を日本から持つて行つたが、そうした樹木は彼等が夢を託した異国の地に生い育って、百年の歳月を経て現在大樹になっている。

この「ワカマツ・コロニー」の地は、ゴールド・ラッシュで有名な地域と隣接している。今日

サクラメントからこの移民団の故地に向うには、初め自動車は平原のハイウェイを走るが、途中からそこを離れて、サクラメント川の支流アメリカン・リバーに沿って次第に山間部へはいって行く。このアメリカン・リバーこそゴールド・ラッシュ時代に世界的にその名を喧伝された川である。一八四八年にこの河岸から一個の金塊が発見されたことがきっかけとなって、それ以後砂金を漁る荒くれ者たちがわれもわれもこの河岸一帯の地に押し掛けたのである。アメリカン・リバーは途中で二つの支流に別れるが、詳しく言えば、その二つの支流に挟まれた一帯の土地がゴールド・ラッシュの夢の跡である。「ワカマツ・コロニー」はその支流の一つに沿って溯って行ったところにあり、ゴールド・ラッシュの狂熱地帯の中に包含されていると言っている。しかし、シュネールたちがここへ来た一八六九年は、既に黄金に憑かれた狂乱の時代が終った直後である。狂乱は襲うのも早かったが、また人々がそれから醒めるのも早かった。一時期の黄金地帯は既に誰からも顧みられぬ廃墟になっていたであろうと思われる。

従ってシュネール一行がこの地を卜して「ワカマツ・コロニー」を作ったのは、アメリカン・リバー沿岸の一攫千金の夢とは全く無関係なものと考えなければなるまい。彼等は純粹な農業移民であり、己が肉体に汗することに依って己が夢を異境に形ある物として生み出そうとしたのである。

今日、私はこのシュネールという人物について詳しく知りたいと思うが、殆ど彼についての記述というものは残されていない。会津風土記に彼の住んだ異人館のあった町が絵高町と記されているという誰かの文章を読んだことがあったが、私にはそれを確かめることはできなかった。一説には、シュネールはドイツ人でなくてオランダ人だとされているが、これも確かなことは判らない。その生国すらはつきりしていないくらいだから、彼がいついかにして日本へ来たか、またいかなる性格の人物であったか、そういったことは一切明らかでない。

しかし、明治二年に会津の農民二十名を率いて渡米したという一事から見ても、彼が充分人に信頼されるだけの魅力をもった人間であったとして、さして大きい間違いはないと思う。そうでなかったら二十名もの農民が一外人の募に応じて、日本を離れて異国に渡ろうという気は起さなかった筈である。年の頃も判っていない。併し、そう若くはないにしても、そう老人でもなかったであろう。まだ充分新天地開拓の夢を懐くことができる肉体の強健さと精神の柔軟さを持っていた年配であつたに違いない。彼は日本人の妻との間に二人の女兒を持っていた。

百年後の今日、結局は失敗に帰した「ワカマツ・コロニー」のことを考える場合、私たちはいろいろな間違いを冒しやすいが、まだ何人もアメリカに移住したことのない明治初年に、それを夢み、それを実行した一団があつたということの持つ意味の大きさは見失ってはならぬと思

う。若しこの集団移民が成功していたら、シュネールも現在とは違って日本移民の父として、開拓移民の先駆者として、その業績は高く評価されていたことであろう。シュネールに付き随った二十人の東北の若者たちもまた同じことである。ただ残念なことに、事實はそうならず、それはあっけなく失敗してしまったのである。

季候は日本に似ているといっても、サクラメントからは四十五マイルも離れている山間の僻地である。入植者の努力と苦闘にも拘らず、事は志と違ってしまった。水利が悪いことが何よりもいけなかったらしい。茶も失敗、養蚕も失敗、果樹園も失敗、忽ちにして一行二十名は窮迫のどん底に落ちてしまった。あらゆる齟齬と失敗の中で、シュネールの資金が欠乏してしまったことが最も大きい痛手であったに違いない。シュネールの持物と思われる黄金作りの短刀や葵の紋のある旗印などが、この移民団と親しかった入植地附近の農家で、地主でもあったベラカンフ家に質のかたとして渡り、それが長く同家に蔵されていたと伝えられている。また他にも附近の農家でシュネールが手離したと思われる日本の絹布の夜具蒲団類を持っていた家もあったという。

この移民団の解散の時期も正確には判っていない。シュネールは金を都合するために妻子を連れて母国へ帰ったが、そのまま再びこの地に姿を現すことはなかったのである。こうした統率者の行為が許すべからざるものであるは言うまでもないが、シュネールとて初めからそうしたこと

を企んで為したのではないであらうと思われる。彼は本当に資金を集めるために母国へ帰ったのであるが、ついにその金を得ることができなかったというのが実情であつたと見るべきであらう。若しシュネールが卑劣な人間なら、後に残された彼の仲間たちがシュネールのことを悪く言う筈であるが、シュネールに対する悪評といったものは少しも残されていない。要するに彼の夢は大きかつたが、それを実現するためには力不足だったのである。

この異境の地に残された一行には当然のこととして離散の運命しかなかった。この開拓計画が打ちきられたのは明治三年のうちのこととされている。「ワカマツ・コロニー」は僅か一年許りで解散の悲運に見舞われたのである。一行は四散し、中には便を得て日本へ帰つた者もあつたらしいが、その大部分の者のその後については知られていない。そのままアメリカに居着いて、その後の足跡を曲りなりにも伝えているのは僅か三人を算えるだけである。

最初シュネールが若松に於て北米移民団を募つた時、二十名(或は四十名)の農民の応募者があつたということは、既に東北の農民の間にもかなりの程度に北米についての知識が普及していたということを示している。そこが自分たちの夢を託するに足る場所であり、充分その開花を期待できる新天地であるという確信を多くの者が持っていたに違いない。シュネールと行を共にした総ての若者がそうでなかつたにしても、その中の主だつた者は太平洋を隔てた大陸に対して、そ

れだけの認識は持っていたのである。

日本最初の遣米使節団が米土に渡ったのは一八六〇年（万延元年）で、シュネールの渡米に先立つこと九年である。日米修好通商条約批准の交換のために派遣されたもので、正使としては時の徳川幕府外国奉行新見豊前守が選ばれ、一行は米軍艦バウタン号で米国へ渡航した。そしてこれを警護する木村摂津守一行も日本軍艦咸臨丸に搭乗して米国に渡った。日本の艦船が公けに米国へ渡航したのはこの咸臨丸が最初であり、この時の艦長は勝麟太郎であった。これ以前に米国の土を踏んだ者がどのくらいあったか判らないが、いずれにしても、それらは漂流者か密航者であった。

徳川幕府はこの日米修好条約締結後もなお渡航の国禁を解かなかったが、併し、日本の使節団が米大陸の土を踏んだことは、日本と米国との間に初めて一本の大きな道が作られたということに他ならない。道路が作られた以上、いつかは、と言うより、そう遠くない時期に人はその道を通らなければならないのである。

吉田松陰が国禁を冒して密航を企てたのは一八六四年（元治元年）で、不幸にして彼は捕えられて斬罪に処せられたが、これに反して後年同志社を創設した新島襄は同じ年に函館から米船に乗

り、翌年ボストンに到着、中学校、大学校を卒えるという幸運を持った。一八六六年（慶応二年）には二人の密航者があった。横井小楠の甥の横井左平太、同大平の兄弟である。アナポリス海軍兵学校に在学中に惜しくも二人共夭折したが、この横井兄弟や新島襄の如きは僥倖中の僥倖と言うべき密航成功者であって、密航失敗者となると、それを記録には留めていないが、かなりの数になるのではないかと思われる。

こうした個人的な密航者の他に、藩の計画に依る大々的な密航者の集団があった。薩摩藩は森有礼等十名の青年に脱藩を装わせて、国禁を冒して英国船で英国に渡らしめた。彼等はロンドン大学に学んだが、明治維新の騒ぎで学資が途絶え、後に米国に渡って学業を終えて帰国している。こうしたことは薩摩藩に限らなかった。伊藤博文、井上馨、鮫島尚信、長沢鼎、横井大平、高橋是清、津田梅子、山川捨松等、いずれもこの時期に藩からの命令で留学した人たちで、幕府は次第にこうした留学生たちを認めて海外旅券を出さなければならなくなって行ったのである。一八六七年（慶応三年）四月七日に日本外務事務局が富田勝之助と高木三郎に下した旅行免状は第六十六号となっていることを見ても、この短い間に於ける時代の急激な推移が窺えるというものである。

明治の時代になると、留学熱は益々高まり、明治初年前後に政府や各藩から欧米に送り出した留学生は数百名に達し、その大部分は米国に渡った。日本政府が第一回文部省留学生を送ったの

は明治八年で、その中に鳩山和夫、小村寿太郎等が名を列ねている。そしてこうした留学生たちの中から米国に永住する者が現れ、そうした人たちが初期の米国に於ける日本人社会の中心的存在になって行くのである。

シュネールの集団移民の渡米はこうした明治初期留学熱が日本に吹き荒れ始めた時代で、彼等が渡米した翌年の一八七〇年に初めて公使館がワシントンに設けられ、ニューヨークには一八七二年に、サンフランシスコには一八七三年に、それぞれ日本帝国領事館が開設されている。サンフランシスコに領事館が設けられた時の加州に在る日本人居住者の調査記録を見ると、男六十八、女子八、子供四となっているが、その殆どが学生であった。この頃米国に渡るのは、新時代の知識を身に着ける目的を持った学生たち許りで、その点シュネールの一行は全く別個な目的を持った別個な渡米集団であった。それはともかくとして、東北の農民がシュネールの募集に応じたのも、こうした明治初期独特の熱っぽく若々しい時代の雰囲気と無縁ではなからうと思われる。

シュネールの集団移民の失敗は、先述したように資金に欠乏を来したことが直接の原因であり、その他にも準備不足とか調査不足とか、いろいろな原因は算えられるに違いないが、最も本質的な問題は少しだけ彼等の移民計画が早過ぎたということであろうと思われる。先駆者というものが例外なく担わなければならぬ悲運を、彼等もまた担ったのである。援け合う同胞の集団もなく、

励まし合う仲間もなかったのだ。「ワカマツ・コロニー」の出發が若し十年遅かったら、——十年でもまだ充分とは言えないが、それにしても事情は全く異つたものになっていた筈である。サンフランシスコ日本人会の成立したのは一八九一年(明治二十四年)で、「ワカマツ・コロニー」が解散した年から十八年あとである。

シュネールに置き去りにされた「ワカマツ・コロニー」は解散を余儀なくされ、二十名の日本人は四散するほかなかったが、その中におけいという娘があり、その墓はいまも彼等が鍬を揮つたゴールドヒルの丘の上にある。おけいはシュネール家の子守女として一行に加わつたもので、シュネール夫人の他では移民団の中のただ一人の女性であった。「ワカマツ・コロニー」解散の翌年一八七一年(明治四年)に十九歳で亡くなっている。日本を出た時は十七歳であつたわけである。

おけいは一行四散ののち、平素この集團の人たちが親しく付合っていたベラカンブ家に引き取られ、翌年その家で他界している。ベラカンブ家の先代ヘンリーは二十年程前に八十四歳で歿しているが、そのヘンリーはおけいより一歳年長で、当時のおけいのことを記憶していてよく人に語っていたと言う。ヘンリーからおけいの話を聞いたという日本人はいま何人かサクラメント